

坂口教授がやってくる。周囲を見回し、ポケットからメモ帳を取り出す。

坂口教授 東京都豊島区東池袋三丁目一の四。ちょうどこの辺りね。

そこへ、大内助手がやってくる。

大内助手 坂口教授、やっぱりここに間違いないみたいです。

坂口教授 ありがとう、大内君。学生たちは？
大内助手 今、来ます。（後ろに向かって）みんな、急げ！

そこへ、石川さん・温井さん・筒井君・実川さん・林さん・森さん・小笠原君・小林さんがやってくる。それぞれ、トランクやリュックを持っている。

筒井君 坂口先生、ちよつと休憩にしませんか。僕、喉が乾いちやって。

実川さん その自販機で、お茶でも買えば？
林さん 何言ってるの。今、授業中よ。

筒井君 （坂口教授に）さっき、モスがありましたよね？ 僕、マックのクォータ
ーパウンダーには目がないんです。

林さん
筒井君
石川さん
筒井君
石川さん
林さん
石川さん
林さん
実川さん
石川さん
実川さん
石川さん
坂口教授
筒井君
坂口教授
筒井君
坂口教授
石川さん
坂口教授

あなた、食事までしたいって言うの？
（坂口教授に）必ず五分で戻ります。一秒でも過ぎたら、単位はいりませ
ん。

筒井君、そんなこと、言っちゃっていいの？

大丈夫です。五分あれば、十個まで行けます。

そういうことじゃなくて、あなた、先月の発表、大失敗したでしょう？

ただでさえ単位が危ないのに、食事がしたいなんてよく言えるわね。

あら、そういう石川さんはどうなのよ。

どうって？

私、見てたわよ。その自販機で、サッポロ黒ラベルを買ったの。

え？信じられない。

大学からここまで、何分歩いたと思う？ 三十分よ。マラソン選手だって、

三十分も走ったら、給水するでしょう？

でも、ビールは飲まないでしょう。

皆さん、私のゼミの研究テーマは宮沢賢治です。ということは、皆さんは

宮沢先生に興味がある。間違いないですね？

ええ。

筒井君は宮沢先生が好きですか？

はい。初めて『銀河鉄道の夜』を読んだ時は、涙が出ました。

石川さんは？

私は、作品そのものより、賢治の生き方が好きです。自分以外の人のため

に必死で働いて。

だったら、考えてみてください。もしここに宮沢先生がいたら、皆さんの

石川さん

ことをどう思うでしょう。もつとまじめにやれて怒るかもしれないね。でも、昔と今じゃ、時代が違うし。

坂口教授

宮沢先生は宮沢先生、私は私ってことですか？

石川さん

そうは言いませんけど。

大内助手

坂口教授、一人足りません。

坂口教授

え？

大内助手

ゼミのメンバーは九人、教授と私を入れたら十一人。それなのに、ここには十人しかいません。

林さん

でも、大学を出る時は十一人いたはずですよ。

筒井君

わかった。きつと一人でクォーターパウンダーを――

実川さん

あなたは黙ってなさい。

大内助手

誰だ？ 誰がいなくなったんだ？

温井さん

わかった。畑中君ですよ。

大内助手

え？

石川さん

何よ。畑中のやつ、また、単独行動？

温井さん

違いますよ。あの人、荷物が多いから、歩くスピードが遅くて。

石川さん

(奥を見て) あ、やつと来た。

そこへ、畑中君がやってくる。リュックやトランクを山のように抱えている。

畑中君
大内助手

ああ、やつと追いついた。
遅いぞ、畑中。

畑中君　　こんな荷物を持たされたら、速く歩けませんよ。
石川さん　自分で持つて言ったんでしょ？　かよわい女性に、こんな重い物を持

畑中君　　僕は実川さんだけに言ったのに。

石川さん　私は女性じゃないって言うの？

畑中君　　女性であることは認めますけど、かよわいかどうかは……。

林さん　　そういうことを言うから、苛められるのよ。

大内助手　坂口教授、これで全員揃いました。

坂口教授　　ありがとう、大内君。皆さん、今日の目的地はここです。東京都豊島区東

池袋三丁目の四。私の研究によれば、賢治島はここにありますが。

大内助手　　全員で、この辺りを探してみよう。十五分後に、もう一度集合をかける。

それじゃ、解散。

石川さん・温井さん・筒井君・実川さん・林さん・森さん・小笠原君・小林さんが舞台上を探し始める。そこに、市川君が加わる。

畑中君　　あの、探すって、何を？

坂口教授　　賢治島です。

畑中君　　ということは、『賢治島探検記』は、賢治島で探検する話じゃなくて――

大内助手　　賢治島を探す話だ。決まってるだろう。

坂口教授　　（畑中君に）このことは、四月の最初の授業で言っておいたはずですよ。

畑中君　　あなた、何を聞いていたんですか？

畑中君　　バイトが忙しくて、あんまり授業に出てないんで。

大内助手

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

坂口教授

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君

坂口教授

小笠原君

森さん

小林さん

たまに出てても、推理小説ばかり読んでるし。だから、単独行動の畑中なんて呼ばれるんだよ。

僕のことより、賢治島のことです。賢治島っていうからには、やっぱり島ですよね？ でも、ここは池袋ですよ。池袋に島はないでしょう。

ランゲルハンス島はどこにありますか？

ランゲルハンス島？

ランゲルハンス島は、人の体の中にあります。臍臓の中で、インスリンや

グルカゴンなどのホルモンを分泌しています。

(畑中君に)わかりましたか？

それはつまり、こういうことですか。賢治島は、マウイ島やオアフ島や佐

渡島みたいな、海に浮かんでいる島ではないと。

イーハトーブはどこにありますか？

イーハトーブ？

おまえ、まさか、イーハトーブも知らないのか？

知ってますよ。イーハトーブっていうのは、岩手のことです。宮沢賢治は、

自分が生まれた岩手のことを、エスペラント語風に、イーハトーブと呼ん

でいた。そうですね？

三十点。

『注文の多い料理店』の新聞案内にはこう書いてあります。「イーハトー

ブは一つの地名である。その地点を求むるならばそれは」

「大小クラウスたちが耕していた、野原や、少女アリスがたどった鏡の国

と同じ世界の中」

「テパーンタール砂漠のはるかな北東、イヴン王国の遠い東と考えられる」

三人

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君

石川さん

坂口教授

大内助手

筒井君

坂口教授

大内助手

実川さん

大内助手

坂口教授

畑中君

「じつはこれは著者の心象中に、このような状景をもつて実在したドリムランドとしての日本岩手県である」

三百点。

で、それがどうかしたんですか。

イーハトーブは現実の岩手じゃない。宮沢先生の心の中の岩手なんだ。でも、そのモデルになった場所は、現実の日本に存在したはず。坂口教授は、

それを賢治島と名付けたんだ。

よくわからないなあ。イーハトーブのモデルは、岩手じゃないんですか？

そうとは限りません。

どうして？

なぜなら、宮沢先生は日本中を旅したからだ。作家は自分の行く先々で、

題材を手に入れる。賢治島はもしかしたら、ここかもしれない。

まさか。

坂口先生、これを見てください。（とどんぐりを差し出す）

これは。

どんぐりですね。『どんぐりと山猫』に出てきたやつかもしれない。

坂口先生、この瓶は？（と瓶を差し出す）

大内君。

『注文の多い料理店』に出てきた、香水の瓶だ。

大内さん、この手拭いは？（と手拭いを差し出す）

『セロ弾きのゴーシュ』で、ゴーシュが持ってきたやつだ。きっと。

どうですか、畑中君？

どうって？

坂口教授

畑中君

坂口教授

畑中君

大内助手

畑中君

大内助手

畑中君

筒井君

畑中君

坂口教授

畑中君

坂口教授

畑中君

坂口教授

これだけ物的証拠が揃えば、文句は言えないでしょう。それとも、まだここが賢治島じゃないと言いつ張りつもりですか？

言い張ります。賢治島じゃないって。さすがは単独行動の畑中。だって、これはただのどんぐりですよ。どんぐりなら、どこにだって落ちてます。

そうだな。でも、このどんぐりは、手拭いと香水の瓶と一緒に落ちていた。こんな偶然はあり得ない。

あり得ます。賢治はたくさん作品を書いている。その中に出てくる物が三つや四つ見つかったからって、驚くことはない。たとえば、僕は今、苹果を持つてる。(とポケットから苹果を出して) これだって、大内さんが見たら――

これは、『銀河鉄道の夜』で、ジョバンニが燈台守もらったやつだ。おまえ、いつの間に拾ったんだ？

拾ったんじゃない。家から持ってきたんです。おやつに食べようと思って。間食すると、太るぞ。

僕のことより、賢治島のことです。ここは賢治島なんかじゃない。いや、それ以前に、賢治島なんてものは、この世に存在しないんだ。

いや、存在します。なぜそう言い切れるんです。

存在しなかったら、淋しいからです。淋しい？ そんなの、理由になってない。

イーハトーブのモデルは、もちろん岩手です。だから、岩手にはたくさん

畑中君

大内助手

畑中君

大内助手

畑中君

坂口教授

石川さん

坂口教授

十二人

十二人が去る。

の賢治島がある。でも、私たちの住む街にも、きつと賢治島はある。街角を曲がれば、ジヨバンニが駆けてくるかもしれない。裏山に登れば、銀河ステーションがあるかもしれない。そう思えなければ、淋しいからです。その気持ちは僕にもわかります。でも、ここは池袋ですよ。池袋にジヨバンニはいない。

そこまで言うなら、仕方ない。坂口教授、そろそろ授業を始めましょう。

ここでですか？

そうだ。ここが賢治島かどうか、みんなで確かめるんだ。さあ、準備を始めよう。

でも、確かめるって、どうやって。

石川さん、トツプッターはあなたです。あなたが拾ったのは、どんぐりでしたね？

そうです。『どんぐりと山猫』に出てきたやつです。

よし、じゃ、始めましょう。

『賢治島探検記』。

坂口教授・石川さん・温井さんがやってくる。石川さんが手紙を取り出し、開く。

温井さん
坂口教授

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。
「かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほで、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで
んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

温井さん

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。

石川さんが手紙をしまう。

温井さん

ね床にもぐってからも、山猫のにやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっています。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみ

石川さん
坂口教授
温井さん

石川さん
坂口教授
石川さん

温井さん

石川さん
坂口教授
石川さん

温井さん

石川さん
坂口教授
石川さん

の方へのぼって行きました。

『どんぐりと――』

山猫と――

馬車別当』。

すきとおった風がざあつと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。

一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい」

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ」

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつと行ってみよう。

栗の木ありがとう」

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。一郎は滝に向い

て叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい」

「やまねこは、さつき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみ

よう。ふえふき、ありがとう」

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白い

きのこが、どつてこどつてこどつてこと、変な楽隊をやっていました。一

郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい」

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ」

「みなみならあつちの山のなかだ。おかしいな。まあもすこし行ってみよ

う。きのこ、ありがとう」

温井さん

坂口教授

石川さん
温井さん

石川さん
温井さん
石川さん
温井さん
石川さん
温井さん
石川さん
温井さん

一郎がすこし行きましたら、まっ黒な樫の木の森の方へ、あたらしいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼって行きました。みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっかにして、汗をぽとぽとおとしながら、その坂をのぼりますと、にわかにはと明るくなって、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれてあります。

その草地のまん中に、せいのおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭をもつて、だまってこつちをみていたのです。その男は、上着のような半天のようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがって山羊のよう、ことにそのあしきとききたら、ごはんをもるへらのかたちだったので、一郎は気味が悪かったのですが、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか」

「山ねこさまはいますすぐに、ここに戻ってお出やるよ。おまえは一郎さんだな」

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知ってますか」

「そんだら、はがき見だべ」

「見ました。それで来たんです」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ」

「さあ、なかなか、うまいようでしたよ」

「あの字もなかなかうまいか」

「うまいですね。五年生だってあのくらいには書けないでしょう」

「五年生っていうのは、尋常五年生だべ」

石川さん

温井さん

石川さん

温井さん

石川・温井

温井さん

石川さん
坂口教授

温井さん

「いいえ、大学の五年生ですよ」

「あのはがきはわしが書いたのだよ」

「ぜんたいあなたはなにですか」

「わしは山ねこさまの馬車別当だよ」

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急に
いねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいとおもって、ふりかえって見ますと、そこに山猫が、黄い
ろな陣羽織のようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました
た。

「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう」

「こんにちは、よくいらつしやいました。じつはおとといから、めんどう
なあらそいがおこって、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考
えを、うかがいたいとおもいましたのです。どうもまい年、この裁判でく
るしみます」

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。
びっくりして屈んで見ますと、草のなかに、あつちにもこつちにも、黄金
いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんな
それは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利
かないようでした。わあわあわあわあ、みんななにか云っているのです。

そこへ、林さん・小林さん・市川君がやってきて、わあわあ騒ぐ。温井さんが鐘を激しく振る。

温井さん

馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんがらんと振りました。音は、かやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこししずかになりました。

坂口教授

林さん

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなおりをしたらどうだ」

小林さん

「いいえ、だめです、なんといったって頭のとがってるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがってます」

市川君

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです」

坂口教授

温井さんが鐘を激しく振る。

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大きいからわたしがえらいんだよ」

坂口教授

「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ」

林さん

「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減に仲なおりましたらどうだ」

小林さん

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです」

市川君

「そうでないよ。大きなことだよ」

坂口教授

「やかましい。ここをなんと心得る。しずまれしずまれ」

温井さん

温井さんが鐘を激しく振る。

坂口教授 「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減になかなおりをしたらどうだ」
林さん 「いえ、いえ、だめです。あたまのものが……」
坂口教授 「やかましい。ここをなんとこころえる。しずまれ、しずまれ」

温井さんが鐘を激しく振る。

坂口教授
石川さん

「このとおりです。どうしたらいいでしょう」
「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなっていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できいたんです」

坂口教授

「よろしい。しずかにしろ。申しわたしだ。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなっていないくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ」
温井さん どんぐりは、しんとしてしまいました。それはそれはしんとして、堅まっています

林さん・小林さん・市川君が去る。

坂口教授

「どうもありがとうございます。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけしてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名誉判事になってください。これからお礼はいたしませんよ」
石川さん 「承知しました。お礼なんかいりませんよ」

石川さん

坂口教授

「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございませうか」

石川さん

「ええ、かまいません」

坂口教授

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしと書いてどうでしょう」

石川さん

「さあ、なんだか変ですね。そいつだけはやめたほうがいいでしょう」

坂口教授

「それでは、文句はいままでのおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすすですか」

石川さん

「黄金のどんぐりが好きです」

坂口教授

「どんぐりを一升早くもってこい。一升にたりなかつたら、めっきのどんぐりもまげてこい。はやく」

温井さん

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかつて叫びました。

温井さんが、どんぐりの入った一升樽を取り出す。

温井さん

「ちようど一升あります」

坂口教授

「よし、はやく馬車のしたくをしろ」

温井さん

白い大きなきこのでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてな

坂口教授

んだかねずみいろの、おかしな形の馬がついています。

温井さん

「さあ、おうちへお送りいたしましょう」
二人は馬車にのり、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

坂口教授
温井さん

ひゆう、ぱちっ。
馬車は草地をはなれました。木や藪がけむりのようにぐらぐらゆれました。馬車が進むにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わってしまいました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立つていました。

坂口教授が去る。

温井さん
石川さん
温井さん

それからあと、山ねこ拝というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えばよかつた
と、一郎はときどき思うのです。

遠くに、坂口教授が現れる。石川さんに向かつて、手を振る。坂口教授・石川さん・温井さんが去る。

実川さん・森さんがやってくる。

二人 『注文の厳しい料理店』

実川さん・森さんが去る。大内助手・畑中君・筒井君・小笠原君がやってくる。

大内助手

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。「ぜんたい、こちらの山は怪しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ」
 「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたつと倒れるだろうねえ」
 それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちよつとまごついで、どこかへ行ってしまったくらい山奥でした。
 それに、あんまり山が物凄いで、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起して、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいま

畑中君

筒井君

小笠原君

大内助手

畑中君 「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」

筒井君 「ぼくは二千八百円の損害だ」

畑中君 「ぼくはもう戻ろうとおもう」

筒井君 「ぼくもちようど寒くはなつたし腹は空いてきたし戻ろうとおもう」

畑中君 「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに戻りに、昨日の宿屋で、山鳥を

拾円も買って帰ればいい」

筒井君 「兎もでていたねえ。そうすれば結局おんなじこつた。では帰ろうじやな

いか」

小笠原君 ところがどうも困つたことは、どっちへ行けば戻れるのか、いっこう見当

がつかなくなっていました。

小笠原・大内 風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんご

んと鳴りました。

畑中君 「どうも腹が空いた。さつきから横つ腹が痛くてたまらないんだ」

筒井君 「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな」

畑中君 「あるきたくないよ。ああ困つたなあ、何かたべたいなあ」

筒井君 「喰べたいもんだなあ」

実川さん・森さんがやってくる。

大内助手 その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。

実川さん そして玄関には、

森さん 〈RESTAURANT〉

〈西洋料理店〉

実川さん
森さん
大内助手
畑中君
筒井君
畑中君
筒井君
大内助手
実川・森
畑中君
筒井君
大内助手
筒井君
実川・森
畑中君
筒井君
大内助手
筒井君
畑中君
筒井君
大内助手

〈WILD CAT HOUSE〉
〈山猫軒〉

という札がでていました。

「ちようどいい。ここはこれでなかなか開けてるんだ」

「こんなところにおかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだろう」

「もちろんできるさ。看板にそう書いてあるじゃないか」

「はいろうじやないか。ぼくはもう何か喰べたくて倒れそうなんだ」

二人は玄関に立ちました。玄関は白い瀬戸の煉瓦で組んで、実に立派なも

んです。そして硝子の開き戸に金文字でこう書いてありました。

「へどなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日な

んぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけ

れどもただで馳走するんだぜ」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ」

二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。

その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

「君、ぼくらは大歓迎にあたってゐるのだ」

「ぼくらは両方兼ねてゐるから」

「ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉があ

りました。

「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう」

「これはロシア式だ。寒いところや山の中はみんなこうさ」

小笠原君

そして二人はその扉をあけようとしまずと、上に黄いろな字でこう書いて
ありました。

実川・森

畑中君

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

筒井君

「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で」

小笠原君

「それあそうだ。東京の大きな料理屋だつて大通りにはすくないだろう」

実川・森

畑中君

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい」

筒井君

「うん。これはきつと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん
下さいと斯ういうことだ」

畑中君

「早くどこか室の中にはいりたいもんだな」

筒井君

「そしてテーブルに座りたいもんだな」

大内助手

ところがどうもうるさいことは、また扉が一つありました。そしてそのわ
きに鏡がかかって、その下には長い柄のついたブラシが置いてあったので

実川・森

す。扉には赤い字で、
「お客さまがた、ここで髪をきちんとして、それからきものの泥を落し
てください」

畑中君

「これはどうも尤もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くび
つたんだよ」

筒井君

「作法の厳しい家だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ」

大内助手

そこで二人は、きれいに髪をけずつて、靴の泥を落しました。そして、扉
をがたんと開けて、次の室へはいつて行きました。扉の内側に、また変な
ことが書いてありました。

実川・森 大内助手 畑中君 筒井君 小笠原君
実川・森 小笠原君 筒井君 畑中君 実川・森
筒井君 小笠原君 畑中君 実川・森 筒井君

「鉄砲と弾丸をここへ置いてください」
見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど、鉄砲を持つてものを食うという法はない」

「いや、よほど偉いひとが始終来ているんだ」

二人は鉄砲をはずし、帯皮を解いて、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「帽子と外套と靴をおとり下さい」

「どうだ、とるか」

「仕方ない、とろう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来ている

のは」

二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉

の中にはいりました。扉の裏側には、

「靴下とズボンとワイシャツと下着をおとりください」

「これはどういふことだ？ 要するに、裸になれと言ってるのか？」

「食事の前に、シャワーでも浴びさせるつもりなんだろう。そうに違いな

い」

「どうする？ 脱ぐか？」

「ここまで来て、帰るわけには行かない。脱ごう」

二人は靴下を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、ワイシャツを脱ぎ、下着を脱ぎました。

すこし行きますとまた扉があつて、その前にタオルが二枚置いてありまし

た。扉には斯う書いてありました。

「腹筋運動と腕立て伏せを五十回ずつやってください」
「腹筋と腕立てを百回だと？ なぜレストランで、筋トレをしなればな

筒井君
畑中君
筒井君
大内助手
実川・森
畑中君
筒井君
大内助手
小笠原君
実川・森
小笠原君
畑中君
筒井君
畑中君
筒井君
小笠原君
実川・森

らないんだ」

「決まってるじゃないか。筋トレをすれば、お腹が空くだらう。お腹が空けば、どんなにまずいものだって、おいしく食べられるだらう」

「僕のお腹はとつくの昔に空っぽだ」

「僕だってそうだ。でも、料理をおいしく食べるためだ。やろう」

二人は腹筋運動と腕立て伏せを五十回ずつやりました。それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、

「本当に五十回やりましたか」

「……実を言うと、僕は数をごまかした。本当は五十回やらなかった」

「……僕もだ」

二人はごまかした数をやり直しました。

疲れ切って、廊下を進むと、また次の扉がありました。

「料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐたべられます。からだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺が置いてありました。

「わからない。今度という今度はわからない」

「ここまで来たら、意地だ。塗ろう」

「うー、ヒリヒリする」

「筋トレをして、汗を掻いた後だからだ。でも、ちよつと気持ちいい」

二人は扉をあけて中にはいりました。扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろな注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。からだ中に、小麦粉を塗ってください」

小笠原君

畑中君

筒井君

畑中君

筒井君

畑中君

大内助手

実川・森

大内助手

畑中君

大内助手

筒井君

大内助手

小笠原君

実川さん

大きなボウルの中に、小麦粉が山盛りになっていました。二人は体に小麦粉を塗りながら、

「どうもおかしいぜ」

「ぼくもおかしいとおもう」

「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ」

「だからさ、西洋料理店というのには、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことなんだ。これは、その、つまり、ぼくらが……」

「ぼくらが、……うわあ」

一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。奥の方にはまだ一枚扉があつて、

「いや、わざわざご苦労です。大へん結構にできました。鍋の油も十分に煮えたぎっています。さあさあ油の中におはいりください」

おまけにかぎ穴からはきよるきよる二つの青い眼玉がこっちをのぞいています。

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「うわあ」

「お客さん方、早くいらっしゃい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがつたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせる丈けです」

森さん

「それともフライはお嫌いですか。そんなら生のままで刺身にしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしゃい」

小笠原君

二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。

実川さん

「いらっしゃい、いらっしゃい、そんなに泣いては折角の小麦粉が流れるじゃありませんか」

森さん

「早くいらっしゃい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っていられます」

小笠原君

二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

大内助手

そのときうしろからいきなり、

小笠原君

「わん、わん、ぐわあ」

大内助手

という声がして、あの白熊のような犬が二疋、扉をつきやぶって室の中になつてしばらく室の中をくるくる廻っていました。また一声、

小笠原君

「わん」

大内助手

と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。その扉の向うのまっくらやみのなかで、

実川・森

「にゃあお、くわあ、ごろごろ」という声がして、それからがさがさ鳴りました。

大内助手

実川さんが去る。

小笠原君

小笠原・大内

大内助手

小笠原君

大内助手

小笠原君

大内助手

小笠原君

畑中・筒井

小笠原君

大内助手

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立ってしまいました。見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬が

「ふう」

とうなつて戻ってきました。

そしてうしろからは、

「旦那あ、旦那あ」

と叫ぶものがあります。二人は俄かに元気がついて、

「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い」

と叫びました。蓑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやっ

てきました。そこで二人はやつと安心しました。そして猟師のもってきた

団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っ

ても、お湯にはいつても、もうもとのとおりになおりませんでした。

大内助手・畑中君・筒井君・小笠原君が去る。

実川さんがトランクを持ってやってくる。トランクを中央に置き、開く。坂口教授・大内助手・石川さん・温井さん・筒井君・林さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君がやってきて、トランクからリコーダーを取り出す。そこへ、畑中君がやってくる。

畑中君　へえ、懐かしいなあ。リコーダーか。

坂口教授　あなたも一本取ってください。

畑中君　いいんですか？　僕、リコーダーは得意だったんですよ。『ボギー大佐』

坂口教授　なら、今でもすぐに吹けます。

畑中君　それは、休み時間にしてちょうだい。

大内助手　え？　今は休み時間じゃないんですか？

畑中君　当たり前だ。授業が始まってから、まだ三十分も経ってないだろうが。

畑中君　あの、このゼミの研究テーマは宮沢賢治ですよ？　賢治とリコーダーは

石川さん　何の関係もないと思いますけど。

坂口教授　ところが、関係あるのよね。

坂口教授　ベートーベン作曲、交響曲第六番「田園」、始め。

十二人がリコーダーで『田園／第一楽章』を吹く。曲が盛り上がってきたところで、実川さんが手を叩く。みんなが吹くのを止める。

実川さん

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ」
「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてま
でいるひまはないんだがなあ。今の前の小節から。はいっ」
「だめだ。まるでなっていない」

坂口教授・大内助手・畑中君・石川さん・温井さん・筒井君・林さん・森さん・小笠原
君・小林さん・市川君が去る。

実川さん

「ゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてな
い。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうして
もびたつと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひも
を引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しつかり
してくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評を
とるようなことでは、みんなへもまったく気の毒だからな。では今日は練
習はここまで」

そこへ、坂口教授・大内助手がやってくる。

大内助手

坂口教授

実川さん

『セロ弾きのゴーシュ』
『ゴーシュ弾かれのセロ』
その晩遅くゴーシュは何か巨きな黒いものをしよってじぶんの家へ帰って
きました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋

坂口教授

大内助手
坂口教授

そこへ、温井さんがやってくる。実川さんは去る。

坂口教授

ゴーシュの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬はひどいやな」

「何だと」

「これおみやです。たべてください」

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもつてきたものなど食うか」

温井さん
大内助手
大内助手

で、ゴーシュはそこにたった一人ですんでいて午前小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきったり甘藍の虫をひろったりしてひるすぎになるといつも出て行っていたのです。ゴーシュがうちへ入ってあかりをつけるとさっきの黒い包みをあげました。それは何でもありません。セロでした。ゴーシュは頭を一つふって椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えは弾きしまいまで行くとまたはじめからごうごうごうごう弾きつづけました。夜中もとうにすぎてもうじぶんが弾いているのかもわからないようになっていまでも倒れるかと思うように見えませんでした。

そのとき誰かうしろの扉をとんと叩くものがありました。

「ホーシュ君か」

ゴーシュはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押してはいって来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫でした。

温井さん

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから」

大内助手

「生意気なことを云うな。ねこのくせに」

温井さん

「いやご遠慮はありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです」

大内助手

「生意気だ。生意気だ。生意気だ」

坂口教授

ゴーシュは足ぶみしてどなりましたがにわかになんか気を覚えて云いました。

大内助手

「何をひけと」

温井さん

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲」

大内助手

「そうか。トロメライというのはこういうのか」

温井さん

「先生もうたくさんです。ご生ですからやめてください」

大内助手

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ」

坂口教授・大内助手が歌う。

温井さんが倒れる。坂口教授・大内助手が歌を止める。畑中君・実川さん・石川さん・筒井君・林さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君が去る。

大内助手

「さあこれで許してやるぞ」

温井さん
坂口教授

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね」
セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが無気ない風で巻たばこを一本だして口にくわいそれからマツチを一本とって
「どうだい。工合をわるくしないかい。舌を出してごらん」

大内助手
温井さん
大内助手
坂口教授

「舌を出す」
「ははあ、すこし荒れたね」

セロ弾きはいきなりマツチを舌でシュツとすってじぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕いたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入口の扉へ行つて頭でどんとぶつつかつてはよろよるとしてまた戻つて来てどんとぶつつかつてはよろよるとげみちをこさえようとなりました。

大内助手
坂口教授

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか」
セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱のなかを走って行くのを見てちよつとわらいました。それから、やつとせいせいしたというようにぐつすりねむりました。

そこへ、実川さんがやってくる。温井さんは去る。

実川さん

次の晩もゴシユがまたセロをかついで帰ってきました。そしてゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。

坂口教授

それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰か屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

大内助手
坂口教授

「猫、まだこりないのか」
ゴシユが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰い

ろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。

そこへ、石川さんがやってくる。実川さんは去る。

大内助手 「鳥まで来るなんて。何の用だ」

石川さん 「音楽を教わりたいのです」

大内助手 「音楽だと。おまえの歌はかつこう、かつこうというだけじゃあないか」

石川さん 「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ」

大内助手 「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、な

石川さん きようは何でもないじゃないか」

大内助手 「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこ

石川さん うとこうなくのとでは聞いていてもよほどちがうでしょう」

大内助手 「ちがわないね」

石川さん 「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一

大内助手 万云えば一万みんなちがうんです」

石川さん 「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの処へ来なくてもいいでは

大内助手 ないか」

石川さん 「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです」

大内助手 「ドレミファもくそもあるか」

石川さん 「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです」

大内助手 「外国もくそもあるか」

石川さん 「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますか

ら」

大内助手 「うるさいなあ。そら三べんだけ弾いてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ」

大内助手がセロを弾く。坂口教授が「かつこうかつこう」と言う。石川さんも「かつこうかつこう」と鳴く。何度も何度も。

大内助手

「こら、いいかげんにしないか。もう用が済んだらかえれ」

石川さん 「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです」

大内助手

「何だと、おれがきさまに教わってるんではないんだぞ」

石川さん

「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか」

大内助手

「ではこれつきりだよ」

石川さん

「ではなるべく永く永くおねがいたします」

大内助手

「いやになっちまうなあ」

大内助手がセロを弾く。坂口教授が「かつこうかつこう」と言う。石川さんも「かつこうかつこう」と鳴く。何度も何度も。

坂口教授

ゴ―シュははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっていますかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするのです。

大内助手

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になってしまふ」

大内助手が弾くのを止める。坂口教授が口を閉じる。

石川さん

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意久地ないやつでもものどから血が出るまでは叫ぶんですよ」

大内助手

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしていられるか。もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか」

石川さん

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちょっとですかから」

大内助手

「黙れっ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしって朝飯に食ってしまうぞ」

坂口教授

するとかっこうはにわかにはびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子にはげしく頭をぶつつけてばたつと下へ落ちました。見ると嘴のつけねからすこし血が出ています。

大内助手

「いまあけてやるから待っていろつたら」

坂口教授

ドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたがいきなりかっこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をばつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまつすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなってしまうしました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがって睡ってしまいました。

そこへ、実川さんがやってくる。石川さんは去る。

実川さん

坂口教授

次の晩もゴーシユは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでい
ますと、また扉をこつこつと叩くものがあります。
今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追い払
ってやろうと思つて待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一疋の狸の
子がいってきました。

そこへ、林さんがやってくる。実川さんは去る。

林さん

大内助手

林さん

大内助手

林さん

大内助手

「こんばんは」
「こら、狸、おまえは狸汁ということを知っているか」
「狸汁ってぼく知らない」
「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベ
ジや塩とまぜてくたくたと煮ておれさまの食うようにしたものだ」
「だつてぼくの父さんがね、ゴーシユさんはとてもいい人でこわくないか
ら行つて習えと云つたよ」
「何を習えと云つたんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡ん
だよ」

林さん

坂口教授

大内助手

林さん

「ぼくは木琴の係りでねえ。セロへ合わせてもらつて来いと云われたんだ」
「狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。」
「それでどうするんだ」
「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください」

坂口教授

狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手に取って、わらい出しました。

大内助手

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ」

坂口教授

ゴーシュは狸の子がどうするのかと思つてちらちらそつちを見ながら弾きはじめました。すると狸の子は棒を持つてぽんぽん叩きはじめました。

大内助手がセロを弾く。林さんが木琴を叩く。坂口教授が『愉快的な馬車屋』を歌う。途中から、大内助手も歌う。

坂口教授

おしまいまで弾いてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。それから

林さん

「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまづくようになるよ」

坂口教授

ゴーシュははつとしました。たしかにそきる糸はどんなに手早く弾いてもすこしたつてからでないと音が出ないような気がしていたのでした。

大内助手

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ」

林さん

「ではもう一ぺん弾いてくれますか」

大内助手

「いいとも弾くよ」

林さん

ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなつていました。

坂口教授

「あ、夜が明けてきたぞ。どうもありがとう」

林さん

狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかにしよつておじぎをすると急

いで外に出て行ってしまいました。ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元気を取り戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

そこへ、実川さんがやってくる。

実川さん

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近くつかれてうとうとしていますとまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。

坂口教授

ゴーシュはすぐ聞きつけて

大内助手

「おはいり」

坂口教授

と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。

そこへ、畑中君・筒井君がやってくる。

坂口教授

そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。

畑中君

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲になおしてやってくださいます」

大内助手

「おれが医者などやれるもんか」

畑中君

「先生、それはうそでございます。先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか」

大内助手

「何のことだかわからんね。」

畑中君

「だって先生のおかげで、兎さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはいあんまり情ないことだと思います」

大内助手

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気なんどなおしてやったことはないからな」

畑中君

「ああこの兎はどうせ病気になるならもつと早くなればよかつた。さっきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになつたのに、病気になるといつしよにぴたつと音がとまってもうあとはいくらおねがひしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう」

大内助手

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。どういわけだ。それは」

畑中君

「はい、ここらのものは病気になるるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療すのでございます」

大内助手

「すると療すのか」

畑中君

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなつて大へんいい気持ちですぐに療する方もあればうちへ帰つてから療する方もあります」

大内助手

「そうか。よし。わかつたよ。やつてやろう」

坂口教授

「ゴ―シュはいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしましました。おつかさんの野ねずみはきちがいのようになつてセロに飛びつきました」

畑中君

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい」

大内助手

坂口教授

そこへ、実川さんがやってくる。畑中君・筒井君は去る。

実川さん
坂口教授

坂口教授
実川さん
大内助手

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちよつと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな」
「ゴ―シユは戸棚からパンを一つまみむしって野ねずみの前へ置きました。野ねずみはもうまるでほかのようになつて泣いたり笑つたりおじぎをしました。りしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。ゴ―シユはねどこへどつかり倒れてすぐぐうぐうねむってしまいました。」

それから六日目の晩でした。
金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの控室へみんなぱつと顔をほてらして舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の音がまだ嵐のように鳴つて居ります。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。
「アンコールをやっています、何かみじかいものでもきかせてやってみませんか」
「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したつてこっちの気の済むようには行くもんでないんです」
「では楽長さん出て一寸挨拶して下さい」
「だめだ。おい、ゴ―シユ君、何か出て弾いてやってくれ」
「わたしがですか」

実川さん
坂口教授

「君だ、君だ。さあ出て行きたまえ」
楽長がセロをむりにゴーシュに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴーシュを押し出してしまいました。ゴーシュが舞台へ出るとみんなはそれを見ろというように一そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

大内助手

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度の虎狩をひいてやるから」

坂口教授

ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

大内助手がセロを弾く。坂口教授が『印度の虎狩り』を歌う。
そこへ、温井さん・石川さん・林さん・畑中君・筒井君がやってくる。

五人

それからあの猫の来たときのようにまるで怒った象のような勢で虎狩りを弾きました。

温井さん

ところが聴衆はしいんとなつて一生けん命聞いています。

石川さん

ゴーシュはどんどん弾きました。

林さん

猫が切ながつてばちばち火花を出したところも過ぎました。

畑中・筒井

扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

大内助手が弾くのを止める。坂口教授が口を閉じる。

坂口教授

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようにすばやくセロをもつて楽屋へ遁げ込みました。すると楽屋では楽長は

実川さん

坂口教授
実川さん

じめ仲間がみんな火事にでもあったあとのように眼をじっとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシュはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさつさとあるいて行つて向うの長椅子へどっかかりとからだをおろして足を組んですわりました。ところが楽長は立つて云いました。

「ゴーシュ君、よかつたぞお。あんな曲だけでもここではみんなかなり本気になつて聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん仕上げたなあ。七日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれるんじゃないか、君」

仲間もみんな立つて来て「よかつたぜ」とゴーシュに云いました。

「いや、からだは丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな」

実川さん・温井さん・石川さん・林さん・畑中君・筒井君が去る。

坂口教授

大内助手

その晩遅くゴーシュは自分のうちへ帰つて来ました。それから窓をあけていつかかっこうの飛んで行つたと思つた遠くのそらをながめながら、

「ああかっこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒つたんじゃないか
つたんだ」

坂口教授・大内助手が去る。

坂口教授・大内助手・石川さん・温井さん・筒井君・実川さん・林さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君がやってくる。ごみ箱や鍋を、手やバチやスプーンで叩き始める。そこへ、畑中君がやってくる。

畑中君

あの、皆さん、何をやってるんですか？

石川さん

坂口先生に言われたのよ。何か、音の出るものを持ってこいって。

畑中君

音の出るもの？ でも、それ、ごみ箱ですよね？

石川さん

(ごみ箱を叩いて) どう？ 結構、いい音がするでしょう？

畑中君

ええ、まあ。でも、人の家のものを勝手に持ってきちゃって、いいんですか？

石川さん

大丈夫よ。演奏が終わったら、返すから。

畑中君

演奏？ リコーダーの次は、ごみ箱の演奏をするんですか？

坂口教授

畑中君、あなたはこう言いたいんでしょう？ 宮沢先生とごみ箱に何の関係があるんだって。

畑中君

まさか、あるとは言いませんよ？

坂口教授

もちろん、言いませんよ。でも、このごみ箱、(ごみ箱を叩いて) こうして叩くと、太鼓みたいだと思いませんか？

畑中君

太鼓ですか？ 賢治の作品の中に、太鼓が出てくるやつなんてあったかな。

大内助手

つべこべ言っていないで、おまえも叩け。一番キレイな音を出したヤツには、坂口教授からご褒美が出るらしいぞ。

畑中君

ご褒美って？

大内助手

学年末のテストに、プラス十点。

畑中君

坂口先生、僕の音を聞いてください。

畑中君が品物を叩き始める。十二人が品物を叩きながら、『風の転校生』を歌う。

歌い終わると、十二人がハンドベルを持ってくる。ハンドベルで、『星めぐりのうた』を奏でる。

坂口教授・大内助手・石川さん・林さん・温井さんが去る。畑中君・実川さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君が座る。

筒井君

「ではみなさんは、そういうふうには川だと云われたり、乳の流れたあとだと云われたりしていたこのぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」

実川さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君が手を挙げる。

筒井君

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか」

畑中君

（立ち上がるが、答えない）

筒井君

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河は大体何でしょう」

畑中君

（答えない）

筒井君

「ではカムパネルラさん」

実川さん
筒井君

（立ち上がるが、答えない）
「では。よし。このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

畑中君
筒井君

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんな川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光のある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのなかに浮んでいるのです。つまりは私どもも天の川の水のなかに棲んでいるわけです。これが今日の銀河の説なのです。今日はその銀河のお祭なのですからみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです」

森さん・小笠原君・小林さん・市川君が立ち上がる。

七人

『光速銀河鉄道の夜』

筒井君・実川さん・小笠原君・小林さん・市川君が去る。坂口教授・温井さんがやってくる。

森さん

ジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。家へは帰らず町を三つ曲って大きな活版処の大きな扉をあけました。ジョバンニは入口から三番目の卓子に座った人の所へ行っておじぎをしました。その人は、

温井さん
森さん

坂口教授
森さん

坂口教授・森さんが去る。林さんがやってくる。

「これだけ拾って行けるかね」と云いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから平たい函をとりだして隅の所へしゃがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いはじめました。「よう、虫めがね君、お早う」六時がうってしばらくたったころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱を、さっきの卓子の人へ持って来ました。その人は黙ってそれを受け取って小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。ジョバンニは威勢よくおじぎをすると台の下に置いた鞆をもっておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

温井さん

畑中君
林さん

ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの」
「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいいよ」

畑中君
林さん

「今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って」
「お前さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

畑中君
林さん
畑中君

「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか」
「来なかつたらうかねえ」
「ぼく行ってとって来よう」

林さん

「あたしはゆつくりでいいんだからお前さきにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行ったよ」

畑中君

「ではぼくたべよう」

温井さん

「ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとってパンといっしょにしばらくむしやむしやたべました。」

畑中君

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰ってくると思うよ」

林さん

「どうしてそう思うの」

畑中君

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかったと書いてあったよ」

林さん

「だけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない」

畑中君

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ」

林さん

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ」

畑中君

「みんながぼくにあうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ」

林さん

「おまえに悪口を云うの」

畑中君

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ」

林さん

「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ」

畑中君

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」

林さん

「ああ行っておいで。川へははいらないでね」

畑中君

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ」

林さん

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一諸なら心配はないから」

畑中君

「では一時間半で帰ってくるよ」

温井さんが去る。

林さん

ジョバンニは、口笛を吹いているようなさびしい口付きで、檜のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのでした。坂の下に大きな街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニがその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなりザネリが、暗い小路から出て来て、ひらっとすれちがいました。

そこへ、小笠原君がやってくる。

畑中君

小笠原君

林さん

「ザネリ、烏瓜ながしに行くの」

「ジョバンニ、お父さんから、らっこの上着が来るよ」

ジョバンニは、ぱつと胸がつめたくなり、そこら中きいんと鳴るよう思いました。

畑中君

林さん

「何だい。ザネリ」

と高く叫び返しましたがもうザネリは向うのひばの植った家の中へはいつていきました。ジョバンニは、また深く首を垂れて、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

林さんが去る。

小笠原君

ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が、高く星ぞらに浮んでいるところに来ていました。牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすくらしい

畑中君
小笠原君

台所の前に立って、
「今晚は、ごめんなさい」
すると、年老った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来ました。

そこへ、石川さんがやってくる。

畑中君
石川さん
畑中君
石川さん
畑中君
小笠原君

「あの、今日、牛乳が僕んどこへ来なかつたので、貰いにあがつたんです」
「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい」
「おつかさんが病気なんですから今晚でないと困るんです」
「ではもう少ししたってから来て下さい」
「そうですか。ではありがとうございます」
「ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。」

そこへ、実川さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君がやってくる。

石川さん

十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、雑貨店の前で六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、やって来るのを見ました。ジョバンニは思わずどきつきとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

小笠原君
四人
石川さん

「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ」
「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ」
「ジョバンニはまっ赤になって、急いで行きすぎようと思いましたら、そのな

かにカムパネルラが居たのです。カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、ジョバンニの方を見ていました。ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、黒い丘の方へ急ぎました。

実川さん・森さん・小笠原君・市川君が去る。

小林さん

ジョバンニは、もう露の降りかかった小さな林のこみちを、どんどんのぼって行きました。林を越えると、俄かにならんと空がひらけて、天の川がしらしらと南から北へ亘っているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わかれたのでした。ジョバンニは、天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

畑中君
小林さん

あああの白いその帯がみんな星だというぞ。
ところがいくら見ても、そのそらは先生の云ったような、がらんとした冷いとこだとは思われませんでした。見れば見るほど、小さな林や牧場やらある野原のように考えられて仕方なかったのです。

そこへ、坂口教授・大内助手・石川さん・温井さん・筒井君・実川さん・林さん・森さん・小笠原君・市川君がやってくる。

十一人

するとどこかで、

三人

銀河ステーション

四人

銀河ステーション

四人

銀河ステーション

十一人

筒井君

小笠原君

石川さん

大内助手
十人

大内助手・石川さん・温井さん・筒井君・林さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君が去る。

実川さん

畑中君
実川さん

坂口教授

と云う声が出たと思うといきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、ジョバンニは、思わず何べんも眼を擦ってしまいました。気がついてみると、さつきから、ごとごとごとと、ジョバンニの乗っている小さな列車が走りつづけていたのです。ジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のなんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。すぐ前の席に、子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。その子供が頭を引っ込めて、こつちを見ました。それはカムパネルラだったのです。

「みんなはねえいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」

「どこかで待っていらっしゃるか」

「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎いにきたんだ。ああしまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない。もうじき白鳥の停車場だから」

カムパネルラは、円い板のようになった地図を、見ていました。その中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄道線路が、南へ南へとたどって行くのでした。

実川さん
坂口教授

「おや、あの河原は月夜だろうか」
そっちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろのすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのでした。

実川くん
坂口教授

「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」
ジョバンニは、まるでね上りたいくらい愉快になって、窓から顔を出して、天の川の水を、見きわめようとしましたが、はじめはどうしてもそれが、はっきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったりしながら、声もなくどんだん流れて行き、野原にはあっちにもこっちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。

実川さん

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか」

畑中君
実川さん

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう」

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」
「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるして下さると思う」

坂口教授が去る。大内助手がやってくる。

大内助手

汽車はだんだんゆるやかにになって、間もなくプラットホームの一系列の電燈

があらわれ、二人は丁度白鳥停車場の、大きな時計の前に来てとまりました。

実川さん

大内助手

「二十分停車」
と時計の下に書いてありました。

畑中君

「ぼくたちも降りて見ようか」

実川さん

「降りよう」

大内助手

二人は一度にはねあがってドアを飛び出して改札口へかけて行きました。二人は、停車場の前の、小さな広場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の中へ通っていました。その白い道を、肩をならべて行きますと、河原にきました。そこに小さな五六人の人かげが、何か堀り出さか埋めるかしていました。

二人

「行ってみよう」

大内助手

二人は、一度に叫んで、そっちの方へ走りしました。白い岩になった処の入口に、

畑中君

「プリオシン海岸」

大内助手

という標札が立っていました。学者らしい人が、助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

そこへ、筒井君・小笠原君がやってくる。

筒井君

「そこその突起を壊さないように。スコープを使いたまえ、スコープをおっと、も少し遠くから掘って。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ」

大内助手

見ると、大きな青じろい獣の骨が、半分以上掘り出されていました。

筒井君

「君たちは参観かね」

畑中君

(うなづく)

筒井君

「ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。これはボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居たさ」

畑中君

「標本にするんですか」

筒井君

「いや、証明するに要るんだ。ぼくらとちがったやつからみてもやつぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風や空に見えやしないかということなのだ。おいおい。そこもスコープではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか」

実川さん

「もう時間だよ。行こう」

畑中君

「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします」

筒井君

「そうですか。いや、さよなら」

大内助手

二人は、白い岩の上を、一生けん命走りました。そして、もとの車室の席に座って、いま行って来た方を、窓から見ていました。

小笠原君が去る。石川さんがやってくる。

石川さん

「ここへかけてもようございますか」

畑中君

「ええ」

石川さん

「あなた方は、どちらへ入らっしゃるんですか」

畑中君

「どこまでも行くんです」

石川さん
実川さん
石川さん
畑中君
石川さん
畑中君
石川さん

畑中君
石川さん
実川さん
石川さん

二人
筒井君
実川さん
石川さん
大内助手
石川さん
実川さん

「それはいいね。この汽車は、じっさい、どこまででも行きますぜ」

「あなたはどこへ行くんです」

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね」

「何鳥ですか」

「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」

「どうしてとるんですか」

「そいつは、雑作ない。川原で待っていて、鷺が下りてくるところを、地べたへつくつかつかないうちに、びたっと押えちまうんです。すると鷺は、かたまつて死んじまいます。あとはもう、わかり切つてまさあ。押し葉にするだけです」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか」

「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか」

「おかしいねえ」

「おかしいも不審もありませんや。そら。ごらんなさい。いまとつて来たばかりです」

「ほんとうに鷺だねえ」

二人は思わず叫びました。まっ白に光る鷺のからだだが、十ばかり、少しひらべつたくなつて、浮彫のようにならんでいたので。

「鷺はおいしんですか」

「ええ、毎日注文があります。どうです、少しおあがりなさい」

「いや、商売ものを貰っちゃすみませんな」

「いいえ、どういたしまして」

「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう」

筒井君 鳥捕りは、何か大へんあわてた風で、
石川さん 「そうそう、ここで降りなけあ」

石川さんがしやがむ。

筒井君 と云ったと思うと、もう見えなくなっていました。
実川さん 「どこへ行ったんだろう」

そこへ、市川君がやってくる。

筒井君 二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、横の窓の外をのぞきました。二人もそっちを見ましたら、たったいまの鳥捕りが、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、じつとそらを見ていたのです。

畑中君 「あすこへ行ってる。きつとまた鳥をつかまえるとこだねえ」
筒井君 と云った途端、空から、鷺が、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱいにおりて来ました。するとあの鳥捕りは、鷺の黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋の中に入れるのでした。二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたって、死ぬときのような形をしました。と思つたら、

市川君が去る。石川さんが立ち上がる。

石川さん 「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、い

畑中君
石川さん

筒井君

「いことはありません」
「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか」
「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観測所です」
窓の外の、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。

そこへ、林さん・市川君がやってくる。筒井君は去る。

林さん
市川君

「切符を拝見いたします」
三人の席の横に、車掌が、いつかまっすぐに立っていて云いました。鳥捕りは、だまって小さな紙きれを出しました。カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっきりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。何でも構わない、やっちなえと思つて渡しましたら、
「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか」

畑中君
林さん

「何だかわかりません」
「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります」

市川君
石川さん

「車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。こいつは大したもんですぜ。どこでも勝手にあるける通行券です。こい

畑中君
実川さん
市川君

つをお持ちになれあ、なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道な
んか、どこまででも行ける筈でさあ、あなた方大したもんですね」
「何だかわかりません」
「もうじき驚の停車場だよ」
カムパネルラが向う岸の、三つならんだ小さな青じろい三角標と地図とを
見較べて云いました。

そこへ、温井さん・森さん・小林さんがやってくる。市川君は去る。

林さん

そしたら俄かにそこに、六つばかりの男の子がたがたふるえてはだしで
立っていました。隣りにはせいの高い青年が一ぱいに風に吹かれています
やきの木のような姿勢で、男の子の手をしっかりとひいていました。

森さん
林さん

「あら、ここどこでしょう。まあ、きれいだわ」
青年のうしろにも十二ばかりの可愛らしい女の子が不思議そうに窓の外を
見ているのです。

温井さん

「ああ、ぼくたちはそらへ来たのだ。もうなんにもこわいことありません。
わたくしたちは神さまに召されるのです」
青年は男の子をジョバンニのとなり座らせました。それから女の子にカ

林さん

ムパネルラのとりの席を指さしました。

小林さん
温井さん

「ぼくおおねえさんのとこへ行くんだよう」
「お父さんやきくよねえさんはまだいろお仕事があるのです。けれど
ももうすぐあとからいらっしやいます。それよりも、おっかさんはどんな
に永く待っていていらっしやったでしょう。早く行ってお目にかかりましよう

小林さん
温井さん
大内助手
温井さん

大内助手

温井さん

ね
「うん、だけど僕、船に乗らなければよかったなあ」
「ええ、けれど、ごらんない、あの立派な川、ね、きれいでしょ」
「あなた方はどちらからいらっしやったのですか」
「氷山にぶつつかって船が沈みましてね、ボートは左舷の方はもうだめに
なっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。私は必死とな
って、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちは
すぐみちを開いてそして子供たちのために祈って呉れました。けれどもそ
こからボートまでお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかな
か居て、とても押しお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかな
の中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかな
しいのをじつとこらえてまっすぐに立っているなどもう腸もちぎれるよう
でした。私はすっかり覚悟してこの人たちが二人を抱いて、浮べるだけは浮
ぼうとかたまって船の沈むのを待っていました。どこからともなく三〇六
番の声がありました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれ
をうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちました。
この人たちをだいてそれからぼうつとしたと思っただけならもうここへ来ていた
のです」
「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそ
れがただしいみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほん
とうの幸福に近づく一あしずつですから」
「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなし
みもみんなおぼしめしです」

大内助手

温井さん

大内助手

実川さん

畑中君

畑中君

そこへ、小笠原君がやってくる。林さんが去る。

小笠原君

畑中君

実川さん

小笠原君

森さん

畑中君

森さん

畑中君

森さん

畑中君

森さん

森さん

「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしょう」

「おや、どっから来たのですか。立派ですねえ」

「いや、まあおとり下さい。さあ、坊ちゃんがた。いかがですか。おとり

下さい」

「ありがとうございます」

ありがとうございます

川の向う岸が俄かに赤くなりました。野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く桔梗いろのつめたそうな天をも焦がしそうでした。ルビーよりも赤くすきとおりリチウムよりもうつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。

「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう」

「蝸の火だな」

カムパネルラがまた地図と首つびきして答えました。

「あら、蝸の火のことならあたし知ってるわ」

「蝸って、虫だろう」

「ええ、蝸は虫よ。だけどいい虫だわ」

「蝸いい虫じゃないよ。僕博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾に

こんなかぎがあつてそれで螫されると死ぬって先生が云ったよ」

「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云ったのよ。むかしのバルド

ラの野原に一びきの蝸がいたんですって。ある日いたちに見附かつて食べ

小笠原君

られそうになつたんですつて。さそりは一生存けん命遁げたけどどううち
たちに押えられそうになつたわ、そのとき前に井戸があつてその中に落ち
てしまつたわ、さそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つて
お祈りしたというの、
ああ、わたしはいままでいくつの命をとつたかわからない、そしてその私
がこんどいたちにとられようとしたときはあんなに一生存けん命にげた。ど
うしてわたしはわたしのからだをだまつていたちに呉れてやらなかつたろ
う。そしたらいたちも一日生きのびたろうに。神さま。どうかこの次には
まことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。そしたらいつ
か蝸はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になつて燃えてよるのやみ
を照らしているのを見たつて。ほんとうにあの火それだわ」
ジョバンニは三つの三角標がさそりの腕のように五つの三角標がさそりの
尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そしてほんとうにそのまっ
赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

そこへ、筒井君がやってくる。小笠原君は去る。

温井さん

「もうじきサウザンクロスです。おりる支度をして下さい」

小林さん

「僕も少し汽車へ乗ってるんだよ」

温井さん

「ここでおきなけいけないのです」

小林さん

「厭だ。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい」

畑中君

「僕たちと一諸に乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符持つて
るんだ」

森さん

「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行く
とこなんだから」

畑中君
森さん

「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか」
「だつておつ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰っしゃるんだ
わ」

畑中君

「そんな神さまうその神さまだい」

温井さん
畑中君

「あなたの神さまつてどんな神さまですか」

畑中君

「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもほんとうのたつた一人の神さ
まです」

温井さん
畑中君

「ほんとうの神さまはもちろんたつた一人です」
「ああ、そんなんでなしにたつたひとりのほんとうのほんとうの神さまで
す」

温井さん

「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんと
うの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります」

筒井君

「ああそのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙やもうあら
ゆる光でちりばめられた十字架が川の中から立ってかがやきその上には青

じろい雲がまるい環になって后光のようにかかっているのです。
そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかに
なりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。

「さあ、下りるんですよ」

温井さん
筒井君

青年は男の子の手をひき向うの出口の方へ歩き出しました。

森さん
筒井君

「じゃさよなら」
女の子が二人に云いました。

畑中君
筒井君

「さよなら」
ジョバンニは泣き出したいのをこらえてぶつきりに云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こつちをふりかえってそれからとはもうだまって出て行ってしまいました。汽車の中は俄かにはらあとしてさびしくなり風がいつぱいに吹き込みました。けれどもそのときはもう汽車はうごき出しと思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうっと流れて来てもうそつちは何も見えなくなりました。

大内助手・森さん・小林さん・筒井君が去る。

畑中君

「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一諸に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百ペン灼いてもかまわない」

実川さん

「うん。僕だつてそうだ」

畑中君

「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう」

実川さん

「僕わからない」

畑中君

「僕たちしつかりやろうねえ」

実川さん

「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」

温井さん

カムパネルラが天の川のひととを指さしました。ジョバンニはそつちを見てまるでぎくつとしてしまいました。天の川の一とこに大きなまっくら

畑中君

な孔がどおんとあいているのです。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一諸に進んで行

実川さん

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集つてるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつあすこにいるのぼくのお母さんだよ」

温井さん

カムパネルラは俄かに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。ジョバンニもそつちを見ましたけれどもそこはぼんやり白くけむっているばかりどうしてもカムパネルラが云つたように思われませんでした。「カムパネルラ、僕たち一諸に行こうねえ」

畑中君

そこへ、坂口教授・大内助手・石川さん・筒井君・林さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君がやってくる。実川さんは去る。

十人

ジョバンニが斯う云いながらふりかえつて見ましたらもうカムパネルラの形は見えずジョバンニはまるで鉄砲丸のように立ちあがりました。

石川さん

そして窓の外へからだを乗り出して力いっばいはげしく叫び、それから咽喉いっばい泣きだしました。

小笠原君

もうそこらが一ぺんにまっくらになつたように思いました。

坂口教授

「おまえはいつたい何を泣いているの」

温井さん

やさしいセロのような声が、ジョバンニのうしろから聞こえました。

小林さん

ジョバンニは、はつと思つて涙をはらつてそつちを振り向きました。さつきまでカムパネルラの座っていた席に黒い帽子をかぶつた大人が、やさしくわらつていました。

坂口教授

「おまえのともだちがどこかへ行ったのだろう。あのひとはね、ほんとう

畑中君

坂口教授

畑中君
坂口教授

森さん

「こんや遠くへ行つたのだ。おまえはもうカムパネルラをさがしてもむだだ」

「どうしてなんですか。ぼくはカムパネルラといっしょにまっすぐに行こうと言つたんです」

「ああ、そうだ。みんながそう考える。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネルラだ。おまえがあうどんなひとでも、苹果を食べたり汽車に乗つたりしたのだ。だからやつぱりおまえはさつき考えたように、あらゆるひとのいちばんの幸福をさがし、早くそこに行くがいい。そこでおまえはほんとうにカムパネルラといつまでもいっしょに行けるのだ」

「ぼくきつとそうします。ぼくはどうしてそれをもとめたいでしょう」

「ああわたくしもそれをもとめている。おまえは化学をならつたらう、水は酸素と水素からできている。いまはたれだつてそれを疑いやしない。実験してみるとほんとうにそうなんだから。けれども昔は水銀と塩でできていると言つたり、水銀と硫黄でできていると言つたりいろいろ議論したのだ。みんながめいめいじぶんの神さまがほんとうの神さまだというだらう、けれどもほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだらう。それからぼくたちの心がいいとかわるいとか議論するだらう。そして勝負がつかないだらう。けれどももしおまえがほんとうに勉強して実験でほんとうの考えと、うその考えとを分けてしまえば、その実験の方法さえきまれば、もう信仰も化学と同じようになる。ああごらん、あすこにプレシオスが見える。おまえはあのプレシオスの鎖を解かなければならぬ」

「そのときまっくらな地平線の向こうから青じろいのろしがうちあげられ、汽車の中はずっかり明るくなりました。」

大内助手
畑中君

そしてのろしは高くそらにかかつて光りつづけました。
「ああマジェラン星雲だ。さあ僕は僕のために、僕のお母さんのために、カムパネラのために、みんなのために、ほんとうのほんとうの幸福をさがすぞ」

筒井君
九人
坂口教授

ジヨバンニは唇を噛んで、マジェラン星雲をのぞんで立ちました。
そのいちばん幸福なそのひとのために！
「さあ、切符をしっかりと持っておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしにほんとうの世界の火や波の中を大股にまっすぐ歩いて行かなければいけない。天の川のなかでたった一つの、ほんとうのその切符を決しておまえはなくしてはいけない」

大内助手・石川さん・温井さん・筒井君・林さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君が去る。

坂口教授

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中につかれてねむっていたのでした。胸は何だかおかしく熱り頬にはつめたい涙がながれていました。ジヨバンニは一さんに丘を走って下りました。まだ夕ごはんをたべないで待っているお母さんのことが胸いっぱい思いだされたのです。ほの白い牧場の柵をまわってさっきの入口から暗い牛舎の前へまた来ました。

畑中君

「今晚は」

そこへ、石川さんがやってくる。

石川さん

畑中君

石川さん

坂口教授

石川さん

畑中君

石川さん

坂口教授が去る。

石川さん

「はい。何のご用ですか」

「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

「あ済みませんでした」

その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶をもって来てジョバンニに渡しながらまた云いました。

「今日はひるすぎうっかりしてこうしの柵をあけて置いたもんですから大將早速親牛のところへ行つて半分ばかり呑んでしまひましてね……」

「そうですか。ではいたゞいて行きます」

「どうも済みませんでした」

ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもつて牧場の柵を出ました。そしてしばらく行きますと町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談しているのです。ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。河原の水際に沿つてたくさんのあかりがせわしくのぼつたり下つたりしていました。するといきなりさつきカムパネルラといつしよだったマルソに会いました。

そこへ、小林さんがやってくる。

小林さん

畑中君

小林さん

「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

「どうして、いつ」

「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えな

いんだ」

畑中君

小林さん

「みんな探してるんだろう」

「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附か

石川さん

らないんだ」
ジョバンニはみんなの居るそちの方へ行きました。学生たち町の人たちに囲まれてカムパネルラのお父さんがまっすぐに立って右手に持った時計をじつと見つめていたのです。

そこへ、大内助手・実川さんがやってくる。石川さんは去る。

実川さん

みんなもじつと河を見ていました。川はばいばい銀河が巨きく写ってまるで水のないそのままのそらのように見えませんでした。ジョバンニはカムパネルラはもうあの銀河のはずれにしかいないというような気がしてしかたなかったのです。

大内助手
実川さん

「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」
ジョバンニは思わずかけよって博士の前に立って、ぼくはカムパネルラで行った方を知っています。ぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたので

大内助手

実川さん

大内助手

畑中君

大内助手

実川さん

畑中君
畑中・実川

すと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。
「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晩はありがとうございました。」

ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。
「あなたのお父さんはもう帰っていますか」

「いいえ。」

「どうしたのかなあ。ぼくには一昨日大へん元気な便りがあったんだが。
今日あたりもう着くころなんだが。船が遅れたんだな。ジョバンニさん。

あした放課後みなさんとうちへ遊びに来てくださいね。」
そう云いながら博士はまた川下の銀河のいっぱいにつつた方へじつと眼

を送りました。ジョバンニはもういろいろなこと胸がいつぱいでなんにも云えずに博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせようと思うともう一目散に河原を街の方へ走りま

た。

走りました。

走りました。

そこへ、坂口教授がやってくる。

坂口教授

どうやら、これで証明されたようですね。

畑中君

何が？

坂口教授

決まってるでしょう。東京都豊島区東池袋三丁目一の四、ここは間違いない。賢治島なんです。

そこへ、石川さん・温井さん・筒井君・林さん・森さん・小笠原君・小林さん・市川君がやってくる。それぞれ、トランクやリュックを持っている。

大内助手

坂口教授、おめでとうございます。

八人

おめでとうございます。

坂口教授

ありがとうございます、皆さん。みんな、あなたたちの協力のおかげです。

大内助手

これで、坂口教授が発見した賢治島の数は、四二七になりました。

坂口教授

そうですか。じゃ、ここは、第四二七賢治島と命名しましょう。

大内助手

皆さん、お疲れさまでした。授業はこれで終わりです。この後、用事のない人は、打ち上げに行きましょう。

石川さん
筒井君
坂口教授
森小笠原小林
坂口教授
筒井君
畑中君
大内助手
畑中君
大内助手
畑中君
大内助手
畑中君
大内助手
坂口教授

酒だ酒だ！
もちろん、坂口先生のおごりですよね？
待って待って。いくら何でも、この人数では――
坂口先生。
ちよつとA T Mに寄り道してもいい？
やったー！
ちよつと待ってください。
何だよ、畑中。
僕には全く理解できません。ここが賢治島だなんて、いつ証明されたんです。
たつた今だよ。
僕らはここで芝居をやった。ただそれだけじゃないですか。
そうだな。でも、そのおかげで、わかっただ。石川が拾ったどんぐりは、間違いなく、『どんぐりと山猫』のどんぐりだった。筒井が拾った壺は、間違いなく、『注文の多い料理店』の塩壺だった。おまえだって、そう思っただろう。
思いませんでした。
じゃ、その苹果は？ ジョバンニの役をやっている時、それはおまえが家から持ってきた苹果だったか？
いいえ。あの時は確かに、燈台守がくれた苹果だと思いました。でも、それはあくまでも芝居の中の話です。僕はジョバンニじゃないし、銀河鉄道にも乗ってない。
いいえ、あなたは乗ったんです。

畑中君
坂口教授

畑中君
坂口教授
畑中君
坂口教授

畑中君

坂口教授
林さん
石川さん
大内助手
坂口教授
大内助手
石川さん
温井さん
大内助手

乗ってません。

その苹果を手にした時、確かにあなたはジョバンニだった。あなたはあの
星空の中にいたんです。

ええ、いました。でも、それは僕の心の問題に過ぎない。

まだわからないんですか、畑中君。私は心の話をしてるんです。

え？

それは、あなたが家から持ってきた苹果です。そんなことはわかりきって
いる。近所の果物屋で、百円か二百円で買ったんでしょう。ごく普通の、
何の特徴もない苹果です。宮沢先生が食べていた苹果も、そんな苹果だっ
たに違いありません。でも、宮沢先生は、そんな苹果を見て、『銀河鉄道
の夜』を書いたんです。

それはつまり、こういうことですか？ この苹果が普通の苹果か、それと
も、ジョバンニがもらった苹果か、決めるのは僕の心だと。

私たちはここが賢治島だと思った。だから、ここは賢治島なんです。

坂口先生、そろそろ打ち上げに行きませんか？

みんなで乾杯しましょう。第四二七賢治島発見を祝って。

坂口教授、一人多いです。

え？

ゼミのメンバーは九人、教授と私を入れたら十一人。それなのに、ここに
は十二人います。

タダ酒にありつこうと思って、誰か紛れ込んだんじゃないの？

わかった。きっと座敷童ですよ。

座敷童？

温井さん

賢治の童話に出てくるでしょう？ 人がたくさん集まると、いつの間にか、一人増えてるんです。でも、それが誰だかわからないんです。

畑中君
大内助手

バカバカしい。そんなの、嘘ですよ。童話の中だけの話です。おまえってやつは、まだわからないのか？ 坂口教授があんなに丁寧に話してくださったのに。

畑中君

だって、おかしいじゃないですか。坂口先生の言う通りにしてたら、日本

坂口教授

中が、いや、世界中が賢治島になってしまう。それが私の夢なんですから。私は間違っていますか、

畑中君

え？

坂口教授

私は間違っていますか、宮沢先生？

畑中君

あの、宮沢先生って？

大内助手
坂口教授

黙れ、畑中。
私はこれからも、賢治島を探し続けます。それでいいんですね、宮沢先生？

市川君がうなづく。その時、風が吹く。

畑中君

風だ。

坂口教授

あの風を追いかけよう。あの風の行く先に、賢治島はきっとある。

さらに、風が吹く。その風を追いかけて、十二人が歩き出す。